雪の中の声

雪の中の声

丹羽文雄

新潮社版

雪の中の声

昭和四十年十一月二十五日　印刷
昭和四十年十一月三十日　発行

定価三九〇円

著者　丹羽文雄

発行者　佐藤亮一

発行所　東京都新宿区矢来町七一
株式会社　新潮社
電話東京(260)一一一一
振替東京八〇八番

印刷・塚田印刷株式会社
製本・植木製本所

© F. Niwa 1965　Printed in Japan.
(乱丁・落丁本はお取替えいたします)

目

次

四人の女　七
妻の秘密　五七
雪の中の声　六九
父帰らず　二一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

独身寮　一四七
焚火　一八五
養豚場　二三三

装幀　田村孝之介

雪の中の声

四人の女

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

駅前はかなり広い空地であり、赤く塗ったバスが二、三台待機している。どこの駅にも見られる風景だが、ここはお世辞にも駅前風景といえなかった。駅前風景と呼ばれるには、それだけの条件がそろっていなければならない。ここの空地は舗装されていなかった。小石まじりの地面が、だらしなくひろがっているにすぎなかった。空地の端に、三軒のうす汚ない商店があった。わすれられたようなわびしい駅前だった。

三軒のひとつは、食堂だった。看板をあげていなかった。鼠色ののれんが垂れていなければ、食堂とは気がつかないであろう。粗末な外観だが、内部も相当いたんでいた。建てたときは、セメントで床を固められたであろうが、うすいセメントの上塗りははげて、泥が顔を出していた。はじめから土を踏み固めた方が、どれだけよかったか知れないのである。はげたセメントのために、足許は注意を要した。ニスのはげた、傷だらけのテーブルと、それにふさわしい木のベンチが数組置かれていた。近ごろは、どのような安手な飲食店でも、みどりや赤のデコラのテーブルに、おなじ色彩のビニール張りの椅子ぐらいはそなえられている。この店には、目につくような色彩がなかった。商売に不熱心といわれても仕方がないだろう。店の間と調理場は、格子で仕切られていた。のぞけば、調理場はまる見えだった。調理場といったところで、一般の家庭の台所

とあまり変らない。異なるところは、竈にかけられた大きな鍋、棚にある数多い食器類だった。何から何まで古ぼけて、くすんでいる。

そんな店で、四人の女がテーブルをはさんでラーメンを食べていた。四人とも、派手な服を着ている。そのため、食堂はいつになく明るい感じだった。ラーメンを食べ、汁も残さずのんでしまうと、四人は喋りはじめた。気がねのいらない、愉しいお喋りのようであった。二人は、二十代であった。のこりは、三十代だが、四十に近い年齢にみえた。四人とも、色や形はいくらかちがっているが、そろって目立つ色の服を着て、申合わせたように花模様のスカーフで髪を覆っている。スカーフで頬かむりするように頭を覆う流行は、二、三年前のものだった。風のつよい日でもなければ、あまり街では見かけないスタイルである。四人は、休みなしに喋った。大したことを喋っているのではなかった。喋ることは、胃の消化をたすけてくれる。四人の服を仔細にみると、派手なわりにどこか野暮くさい。中のひとりはパットを入れて、肩をいからせた流行おくれの服を着ていた。ほかのひとりは、非常識なくらい長いスカートだった。ほかに客がいないので、四人はよく喋り、よく笑った。それぞれの背後に、それぞれちがった家庭を擁している女たちのようには見えなかった。

一時間あまり経って、四人は外に出た。ラーメンの払いは、兵隊勘定だった。日曜日だったが、駅前はひっそりとしている。駅に入るすこし手前に踏切があった。四人の女は踏切をわたると、よく舗装された道路を北へ横隊になって歩きはじめた。道の左側は、分譲地で、四、五軒の家がはなればなれに建っていた。のこりの土地は、草で覆われている。動いているもののない、わびしい風景である。右側には、金網の柵がずうっとつづき、柵内にはかぞえきれぬほどのドラム罐

が整然と置かれていた。そこは、アメリカ空軍の基地だった。

踏切から二〇〇メートルばかりに、基地のゲートがあった。通用門程度の小さいゲートだが、白塗りの小舎が通路の中央に建てられ、紺の制服に白のヘルメットの日本人のガードが、出入りするものをいちいち調べ、許可をあたえている。四人の女はゲートに近付くと、無言になり、めいめいのハンドバッグからパスを取り出した。顔見知りとみえて、ガードは差し出されたパスを見ようともせず、オーケーの合図をしめした。

ゲートの内と外は、がらりとようすが変った。ほこりっぽく、古ぼけて、活気のない外にくらべると、ゲート内は別世界であった。舗装された道路には、紙屑ひとつ落ちていない。色とりどりの大型車が、音もなく走った。最新式の外車ばかりでなく、旧車も走っているが、ゲート内の道を走っていると、いずれも高級車に見えた。ここは、住宅地帯であった。塵ひとつない自動車道路の両側は歩行道路だが、歩行者はほとんど見あたらない。歩行路から内側は芝生であり、芝生の向うに米軍人の宿舎が建っていた。屋根はグリーン、ほかは白色、と統一された建物が点々と建っている。平屋もあり、二階建もあった。二階建はかなり大きく、入口も二つ乃至四つあり、一ト棟に二家族から四家族が住めるようになっているらしい。平屋の方も、大きさの点で数種類に分けられているようだが、共通しているところは、いかにも清潔で、明るい家屋だった。ゲートの内は、空気までが異なっているようであった。その外観は、映画に出てくるアメリカの郊外の住宅地帯を思わせた。窓からものを落しても、奪っていくような人間はいないのだ。その家の人間が拾い上げるまでは、落ちたものはそのままであった。だれも芝生を傷つけない。どこの芝生よりも、草は安心して茂っているようであった。四人の女は喋りながら歩いた。

ゲートから七、八分歩くと、一ト棟のアパート風の建物があった。新しい建物である。基地内のほかの建物と調子を合わせているが、よく見ると、いくらか変っているのに気がつく。物干場にある日本の浴衣や、ネルの寝巻のせいだった。ここは、サウス・ドミトリイと呼ばれる、基地内で働いている日本の女性専用の寄宿舎だった。このほかにもう一ト棟、ノース・ドミトリイと呼ばれるのがあった。そこは、かなり前に建てられたものだった。四人の女は宿舎にはいると、二タ組に分れて部屋にはいった。

部屋は全部おなじひろさで、おなじつくりで、六畳の日本間だった。一室に二人、現在では空室がなかった。炊事室、娯楽室、ミシン等がそなえてある家事室、浴室、手洗所と設備は完備されている。豊富に電力を使う基地内だけに、電気はいくら使ってもかまわなかった。湯は、朝から使用出来た。電気器具類は、どのようなものでも自由に使えた。アメリカ人的な、むだのない、快適な生活が出来るようになっている。

「これで寮費が月五、六百円だというと、外のひとは信じてくれないわ」

「いたれりつくせりの宿舎設備を、一度自分の目でたしかめない内は、外のひとは信用出来ないのね」

基地内で働く日本女性は、相当数に上る。職種も多かった。大学卒業程度でなければ勤まらないセクレタリー、タイピストから、高校出でつとまるクラークと呼ばれる事務員。技術方面になると、洋裁師、美容師、お茶や生花の教授、人形造りの先生までいた。だれにでも出来る仕事としては、ウエイトレス、ハウスメードだった。大部分のものは、自宅から通っていた。基地の付近に、或いは都内に家のないものは、寄宿舎にはいることになっていた。

サウスとノースの両ドミトリイの住人の大部分が、ハウスメードであった。その二割が、ウエイトレスだった。ドミトリイは、メードの寮といってもよかった。四人の女は、そろってハウスメードだった。

「私たちは、一見して、ハウスメードとわかるらしいわね」

「メードタイプってものがあるのかしら。私は、ちっともそんなふうには感じてないんだけど」

ながいことハウスメードをつとめていると、本人の気がつかない内に、ひとつのタイプが身についてしまうものらしい。自分の臭さには、気がつかないものだ。そのことは、何もハウスメードに限ったことではなかった。が、メードタイプと指摘される第一の条件に、その服装が挙げられる。四人の女がそうであるように、メードの服装は派手だが、どことなく垢抜けなかった。それは、勤務先の外人から衣類のもらいが多いせいだった。日本人とちがい生活程度が高いといわれたところで、アメリカの女たちが日本人使用者にくれるものは、古くなって、必要としなくなった品物である。メードはそれを直したり、そのまま着ているので、派手で、野暮ということになる。アメリカ人の家庭にはいってみると、アメリカの一般の女たちは、流行にそれほど関心をもっていないことがわかる。それにくらべると、日本のBGの方がはるかに流行に敏感であり、流行が自分に似合うと、似合おうまいとかまわない、ひたすら流行に奉仕する。流行においてきぼりをくらうことが、つらいのだった。アメリカの女たちは、形でも生地でも、日本のBGよりも質の悪いものを平気で着ている。かの女たちは、形でも色でも、自分に似合うものを選んだ。それが流行から外れていようと、かまわないのだ。流行おくれのものを着ていても、かの女にはよく似合う。まるで斬新な流行のように錯覚させた。そんなアメリカの女たちを見なれてしまう

と、ハウスメードは、もらった衣類が多少古くさいと思われても、それほどには感じなくなってしまう。平気で着るようになる。

メードたちは、日曜以外は基地を出なかった。出るにしても、せいぜいT市だった。T市には、米人が多い。米軍人を相手にする職業的な女が多いのだ。銀座、渋谷、新宿といったさかり場とは雰囲気がちがった。メードたちは、自分の趣味や服装をひとのものと比較して、気にする必要がなかった。メードたちは、流行に敏感でなくなってしまう。流行を知らなくとも、痛痒を感じなくなってしまう。しかし、このことは流行に超然としているというのとはちがう。

「あのひとは、メードさんだな」

と、職業をいいあてられるのもやむをえなかった。

メードたちは、街に出るとき、ハンドバッグや風呂敷を使用しなかった。買物には、茶色のハトロン紙の袋を使った。どの家庭にも、紙袋はたくさんあった。メードたちはアメリカ人を見ならって、紙袋を使用するようになった。いらなくなれば、捨ててしまえばよかった。勤先にいけば、紙袋はいくらもあった。メードたちは、あらゆることに紙袋を使った。日本の商店も、最近では紙袋を客に出すようになった。派手な柄や色彩の、横文字を印刷した紙袋を若い女性が得意になってぶらさげているが、メードたちは十年も前から紙袋を使用していた。このあたりで大きな茶色の封筒を、それも並はずれに大きな袋に品物を入れている女をみかけたら、ハウスメードと見てまちがいはなかった。

不思議なことに、ハウスメードは、四十歳前後と、二十歳をすこし越えたグループに分れてい

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com